

よさこい踊りにおける元気の印象形成

1 1 3 2 0 5 6 岸川徳晃

指導教員：山崎治 准教授

1. はじめに

『よさこい』『ソーラン節』はどちらも日本の民謡である。発祥の地である高知や北海道で踊られていたものが、近年認知度が高まり日本全国で幅広い年代の人々に踊られている。

よさこいの踊りに対する分析については、株本(2012)が、個人の踊りをみているときの熟練者と未経験者の視線の違いについて検証を行った。しかし、株本の研究は、踊り子一人による踊りを材料として用いており、集団での踊りに対する分析は未だ行われていない。

集団での踊りにおいて、観客や審査員が踊りのどのような要素に着目しているかを調べることで、踊り子が観客や審査員が受け取る印象を意識出来るようになり、踊りを見る人々に元気を感じさせられるような踊りをできるようにと考えられる。

2. 目的

本研究では、観客や審査員が「元気」を感じる演舞の要素を明らかにする。そして、踊り子が見る人により多くの「元気」を感じられる演舞を行うための指針をたてることが目的である。

そこで、よさこいの踊りの「構成」と「速さ」の違いに着目し、それらが「元気」の印象評価に与える影響について調査を行った。

3. 実験

実験では2つの実験を行った。実験1では実際の演舞動画、実験2ではCGキャラクタを用いた動画で実験を行い、踊りの印象評価を行った。

3.1 方法

実験参加者：本学学生15名（男性13名／女性2名）

実験計画：実験1は、「構成」を集団が同時に動く「同時」、起点から連鎖して動く「連鎖」として、「同時」「連鎖」の2条件を設け、1要因2水準参加者内計画を実施した。実験2では、「構成」の2条件に加え、「速さ」を「速い」「遅い」の2条件を設け、2要因2×2水準参加者内計画で実施した。

材料：実験1は2本、実験2は4本の動画を使用した。実験1の動画は、千葉工業大学体育会よさこいソーラン風神部の演舞（『覇十楽』）を撮影し、15秒程度のシーンの2ヶ所を抽出し使用した。実験2の動画はモーションデータを撮影し、キャラクタに割り当て、踊りの動画を4本作成し使用した。

また、評価用紙の質問項目は小林(1999)が作成したSD法評価軸より、21項目選別し、踊りの評価軸として正しいものを調査し12項目を選別したものである。

手続き：実験は、実験1・実験2を続けて実施した。

実験前に実験の流れと実験内容の説明を行い、「調査対象者の基本情報」「調査対象者の踊りに対する経験」に対する回答をするように教示した。その後、スクリーンに映した15秒ほどの踊りの動画を視聴してもらい、「踊りの動画に対する印象評価」につい

て回答してもらった。回答中には同じ動画を繰り返し再生し、見直すことも可能にした。同様の手順で実験1・実験2を行い、合計6本の動画に対して実施した。また、動画の提示順序を参加者グループごとに入れ替え、順序効果を相殺した。

3.2 結果

実験1の結果を条件ごとに分けた「元気」の印象評価得点を比較した結果を図1に示す。

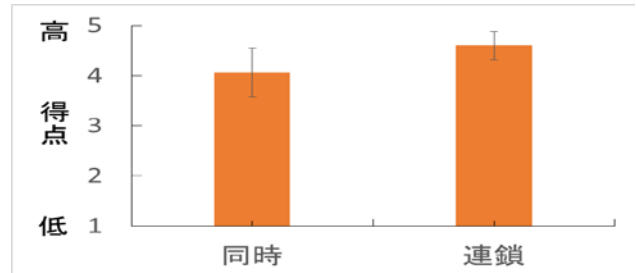


図1 実験1:「構成」による元気の印象評価得点

t検定を行った結果、条件間の元気の印象評価得点に有意差がみられた($t(14)=-2.26, p=.04, r=.52$).

また、実験2の結果を速さの条件ごとに分けた「元気」の印象評価得点を比較した結果を図2に示す。

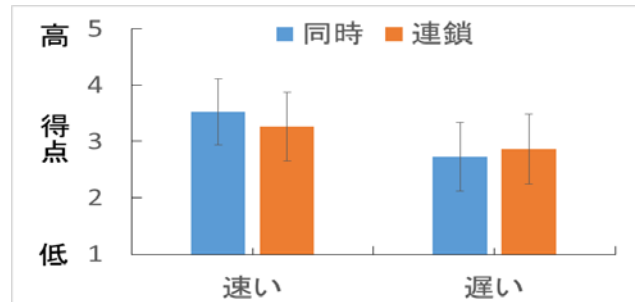


図2 実験2:「速さ」による元気の印象評価得点

2要因分散分析を行った結果、条件間の「元気」の印象評価得点では「速さ」の主効果が確認された($F(1, 14)=5.77, p=.03$, 偏 $\eta^2=.29$). また、「構成」では主効果が確認できなかった($F(1, 14)=.07, p=.79, n.s.$, 偏 $\eta^2=.01$).

4. まとめ

踊りの要素を抽出した実験2では、踊りの構成ではなく、動きの速さで有意差がみられた。この結果から、動きが速いほど元気を得られる傾向にあることが明らかになった。また、二つの実験を比較すると「人」の時により多くの元気を得られていることから、観る人は、踊り子の表情や声などからも元気を感じていると考えられる。

参考文献

- 株本 涼 (2012). よさこい踊りにおける着眼点～熟達者と初心者の違い～ 千葉工業大学情報科学部情報ネットワーク学科 2012 年度卒業論文 (未公開).
- 小林 重順(1999). カラーシステム 講談社